

サ  
バ  
イ  
バ  
ル  
・  
ウ  
エ  
デ  
イ  
ン  
グ

大  
橋  
弘  
祐

「これ、わたしのパンツじゃないんだけど……」

深夜二時、黒木さやかがセミダブルのベッドから手を伸ばして掴んだのは、見覚えのないピンクのパンツだった。背中を向けて寝ていた和也は素早く振り返り、一瞬驚いた顔をしてから、不自然なほど真剣な表情をつくった。

「あ、それ……。それは、あれだよ」

「なに？ あれって」

「だから、あれだよ、あれ。なんていうか、その……。プレゼントだよ。さやかへのプレゼント」

「は？ 何言ってるの」

「だからプレゼントだって。ほら、俺たちって付き合ってもうすぐ四年だろ。驚かせようと思って隠しといた。なんていうんだっけ？ こういうの」

「もしかして、サプライズ……」

「そう、それ。サプライズ」

手にしたパンツを広げると、ゴムは伸びていて、真ん中のリボンが傾いていた。どう見ても誰かがはいたものだった。

「ありがとう。前から欲しかったんだ、こういうの——。て、なるわけないよね」

昨日、さやかは七年間勤めた出版社を辞めた。商社で働く二つ年上の和也と、三十歳の誕生日に結婚するためだ。

それなのに三か月後に永遠の愛を誓うはずの男は今、説得力のなさすぎる嘘をついている。

「じゃあ、どこで買ったのよ、これ」さやかはパンツを和也の顔に近づけた。

「ルミネだよ。新宿の」和也は真顔でもっともらしいことを言う。

「ルミネのどこ？」

「どこだっけか……。だいぶ前に買ったからな」

「思い出してよ」

肩を揺すると、和也は逃げるようにベッドから起きあがり、ソファーに腰を下ろした。

「たしか地下だったと思う。よくあそこ通るからさ」

「ルミネの地下歩いてたら、これ見つけて、彼女のプレゼントにいいと思って買ったの？」

「ああ……。そうだよ」

「そんなの変態じゃん」

気づいたら大きな声を出していた。どうしてそんなばかばかしい嘘をつくんだ。涙が浮かんでくる。

「わたしたち結婚するんだよ。わかってる？」

和也は下を向いて黙りこんでしまう。

いつかこんなことになるだろうと思っていた。メイク落としの位置が微妙にずれていたり、バスタオルにボディークリームのおいが染み付いていたり、和也の部屋には他の女の気配があった。浮気相手はこのパンツをわざと忘れていったのだろうか、それとも下着を置いていくような関係なのだろうか。

とにかく素直に謝って、もう浮気はしない、お前のことを幸せにするって誓ってほしい。

「本当のこと言っつてよ」

さやかがつぶやくと、うつむいていた和也は顔を上げ、何かを飲み込むように喉元を動かした。

「さやか、ごめん。実は……」

今から浮気を告白されるのか――。心臓が締め付けられる。

結婚するんだったら浮気くらい大目に見なければいけないのかもしれない。でもやっぱり浮気の告白なんて聞きたくない。実は浮気してなかったなんてことはないだろうか。さっきのパンツを見る。ここに証拠があるんだ。それはないか。

「実は、俺……」

和也は力のない声を出した。心臓が高鳴り、シーツを掴む手に力が入る。

「……結婚できない」

「へ？」

「本当にごめん……。結婚できないんだ」

は——。結婚できないって、どういうこと？ 浮気の告白じゃないの？ 頭の中が真っ白になる。

「な、何言ってるの。週末、式場で坂田さんと打ち合わせだよ」咄嗟にそんなことを口にしてた。

和也は唇を噛んで、黙っている。

「変な冗談やめてよ。お母さん、親戚に言いふらしちゃったし」

「ごめん」

「旅行の予約だったし」

「ごめん」

「ごめんって……」

和也の決めこんだ目を見て、婚約を解消されるのだと、ようやく頭が理解した。同時に体が熱くなってくる。

「でも和也、結婚したいって言ったよね」

「すぐにしたくないなんて言っていないだろ」

「じゃあ、いつならよかったのよ」つい感情的な声を出してしまう。

「そんなの知るかよ」和也がテーブルを叩く。ガラスのぶつかる音がした「そういうのは話し合って決めることだろ。どうして、さやかがなんでもかんでも勝手に決めていくんだよ」

「だって、和也の仕事が忙しそうだったから」

もちろん早く結婚したい気持ちがあったと言えば嘘になる。もうすぐ三十になるし、このまま付き合っているのも不安だった。ただ、和也にも意見を聞いていたが、反応が悪かったから一人で式や旅行の準備を進めていった。

「だからって、なんで今さら言うの」

「さやかが結婚のことばかり話すから、言い出せなかったんだ」和也はテーブルの上

にあったタバコを一本取り出した。「とにかく結婚はもう少し待ってほしい。今はまだ自分の時間を大切にしたい」

「何言ってるの。わたし会社辞めたんだからね」

「辞めるなんてひどいことも言っていないだろ」

和也が声を荒げて、吸い始めのタバコを灰皿に押しつけた。

「結婚、結婚って重いんだよ」

けんかをする、和也が謝るのがいつものパターンだったので、次の言葉が出てこない。嗚咽がとまらず、呼吸するのがやっとだった。

しばらく沈黙が続いた。湧き出す音と時計の音だけが部屋に響く。

「もう終わりにしよう」和也は何本目のタバコに火をつけた。「さやかといるとっらいんだ」

「結婚するって言ったじゃん……」

これ以上ここにいると喚き散らしてしまいそうで、荷物をバッグに放りこんで部屋を飛び出した。マンションのエレベーターは、和也に追いかけて欲しいという思いを察することなく一瞬で一階に着いてしまう。

外は雨だった。振り返って立ち止まったが、雨の勢いが増すばかりで、和也が出て

くることはなかった。

さっきまでいたマンションに冷たく見下ろされた。

★

朝、冷たいものが顔に触れて目を覚ました。テーブルにうつ伏せのまま寝てしまったらしい。頭をのせていた腕がしびれて痛む。

テーブルの上には結婚情報誌と焼酎のボトルがあった。携帯のアラーム代わりにさやかを起こしたのは、グラスからこぼれた泡盛だった。

自分の部屋に戻ったあと、濡れたカーディガンすら脱がずに、泡盛を飲みながら寝てしまったらしい。昨日の出来事が夢ではなかったことを、体に走る寒気が教えてくれた。

鏡に目をやると、涙でマスカラが落ちて目のまわりが黒かった。濡れた雑誌の上で寝てしまったから、「婚」の字の一部が顔についている。

時計に目をやると、すでに八時を回っていた。シャワーを浴びたあとに、どれくらいメイクに時間をかけられるか計算をした。が、すぐに大切なことを思い出した。

わたし会社辞めたんだ——。

その場で横になってみた。床に置いてあったウエディングドレスのカタログが目に入る。レンタルだといいいのがなくて、オーダーメイドにしてしまったことを思い出した。

腕を伸ばすと、何か尖ったものが指先に触れる。目の前に持つてくるとクレジットカードの請求書だった。そういえば、独身最後の記念に行ったインド旅行で結構使ってしまった。怖くて封を開けられない。

来月の家賃八万三千円は払えるのか。無職で明日から暮らしていけるのか。次々と不安が頭を過る。

もしかして、これってものすごくやばい状況なんじゃないの。フローリングに触れた背中が急に冷たくなってきた。何かの間違いじゃないかと思いたかったが、どう考えても現実だった。

和也から連絡がきているかもしれない。

二日酔いの頭痛がひどかったので、四つん這いになって玄関に行き、置きっぱなしにしていたバッグの中から携帯を取り出した。

着信はなかった。待ち受け画面に表示されていたのは二人で行った花火大会の写真

だ。いつもは何気なく見ていたものが、今日は涙腺に訴えかける。

和也は地元に進学に通う先輩で、予備校の廊下で一目惚れして以来、高校生活の大半を片想いで過ごした。人生の最初に刻まれた恋心は代わりがきかないもので、別の彼氏ができて、もの足りないような感覚があった。

だから、大人になった和也と偶然東京で再会し、「もしかして、さやちゃん」と声をかけられたときは運命的なものを感じた。手に入らないものが手に入ったからか、絶対失いたくないと思った。

無理に結婚しようとしなくて、もう少し待ったほうがよかったのか。さやかは目にティッシュをあてた。

睨まはに母の顔が浮かぶ。相談しようか。携帯に番号を表示させたが指が止まってしま

う。母は離婚しているせいかわ、結婚しろと口にすることはなかった。でも、和也を連れて帰ったときは涙ぐんで喜んでた。本当は結婚してほしいのだと、親心を知った。

そんな母に職を失った上に婚約を破棄されたなんて言えないし、頼るわけにもいかに

い。このまま寝てしまいたくなくなった。現実から逃れたい。もう何も考えたくない。

目をつむったとき、床で携帯が震える音がした。慌てて画面を見る。

かけてきたのは和也——、ではなく上司の原田だった。

「黒木すまん。引き継ぎのファイルどこやった？ 共有サーバーを探したんだけど見当たらず……」

相談しようかと思った。原田は仕事に行き詰まると、遅くまで話を聞いてくれるようなやさしい上司だった。今だったら退職を取り消してもらえるかもしれない。ここでもなんとかしておかないと、ものすごく面倒なことになる気がする。

だからといって、婚約を破棄されたから復職したいなんて言ったら、寿退社に失敗した女だと噂される。そんなの恥ずかしすぎる。

ファイルの場所を教えて電話を切ると、インターホンが鳴った。モニターに映っていたのは佐川急便の人で、届いたのは通販で買ったダイエツト器具だ。結婚式までにノースリーブのウェディングドレスが似合うように二の腕をなんとか細くしたかった。代引きで二万八千円と手数料の五百円を払うと、財布の中には八百円しか残ってなかった。

さやかは会社に電話をした。

★

昨日までは抵抗なく開けられたオフィスのドアが、今日はなかなか開けられない。

下の階のトイレに行つて、メイクを直しながら心を落ち着かせようとしたが、ずっとそわそわしたままだ。おかげでマスカラを塗りすぎた気がする。

そうこうしているうちに約束の時間になってしまった。

この出版社に入社したのは、書籍の編集を経験して、いつかは自分の本を出すのが夢だったからだ。もともとおじさん受けだけはよく、面接で役員と出身が同じ福岡だったという幸運もかさなり、中堅とはいえ希望どおり出版社に就職できた。

ただ、さやかが配属されたのは発行部数と残業時間が社内トップの「週刊エッジ」という週刊誌の編集部だった。そこでは、「B級ミシユラン」というグルメ記事を担当した。

「B級ミシユラン」はビジネスマン向けにガード下の居酒屋やラーメン店を紹介している人気コーナーで、殺人的なスケジュールをなんとかこなしていたおかげで、読者アンケートでも常に上位だった。だからなんとなく復職には自信があった。

それに関係ないかもしれないが、同じ編集部の人に告白されたことがある。しかも二人に。

そのうちの一人が隣に座っていた山崎で、よく「チゲ鍋行きましょうよ」と誘ってきた。会社の同期と女子会をするときには、チゲが変化してチャゲと呼ばれていて、「チャゲは最近も誘ってくる？」とか「チャゲはやっぱりハゲ」などと話していた。

とにかく、この編集部で自分は必要とされていたんだ。そう言い聞かせてドアを開けた。

オフィスに入ると「あれ、結婚やめたの？」と笑えないことを言ってくる人がいたが、笑ってごまかした。ほとんどの人がさやかのことなど気にせず、ただ通り過ぎるだけだ。いつもどおり忙しく働いている人たちを見ると、社会からはじき出されたような気がして、通い慣れたオフィスなのに居心地が悪かった。

一番奥にある編集長のデスクには、ニットのベストを着た原田が座っていた。

「なんだ黒木、話って？ 忘れ物でもしたのか」

笑顔で言ってくれたので、少しほっとした。

「ちょっとご相談があります……」

他の人に聞こえないように小声で言った。ぱつが悪そうな顔を察してくれたのか、

原田は奥の会議室に通してくれた。

「ここだけの話にしてくださいなのですが、実は……」

結婚が破談になったことや、復帰したいことを正直に話した。

「それは厳しいな。もう処理されてしまっただろう。今から取り消すにしても理由がない……」原田は首のうしろを掻きながら答えた。

「そこをなんとかお願いできませんか。今まで以上にB級ミシュラン頑張ります」

頭を下げたが、原田は苦笑いのままだ。

「実はもう後任の子が来てるんだ……」

ブラインドの隙間から自分のデスクを覗くと、新しい女の子が座っていた。丈の短いワンピースを着て、毛先をきれいに巻いた新入社員風の子だった。

隣の席の山崎がうれしそうに話しかけている。「チャゲのやつ……」少しいやな気持ちになった。

「他の仕事でも構いません。なんとか働かせてもらえませんか」さやかはもう一度頭を下げた。

「そう言われてもな……。知っているとと思うけど、雑誌が売れてないだろ。うちもかなり厳しくてな。今年は二誌も休刊が決まってるし、さっきも、もう一誌休刊にするか



どうか会議していただくらいなんだ……」

「どんな仕事でもするんで」と食いが下がったが、結局いい返事が聞けなかった。

オフィスから少し離れたところにあるスタバに入った。知っている顔に会いたくないからだ。

いつもはシナモンロールと一緒に注文するが、財布の中身を考えてコーヒーだけにした。三百円するシナモンロールがこれからずっと食べられないような気がして悲しくなる。

奥のソファ―に体を沈めると、ずっと座っていたくなかった。寝不足のせいか体が重い。

なんで会社辞めちゃったんだろう――。

好きな仕事をしながら幸せな結婚も手に入れる。それが入社していたころに想像していた三十歳の自分だった。だから実力をつけるためにがむしゃらに働いた。仕事を頼まれたら喜んで引き受けたし、記事はライターさんにお願ひしないで自分で書いた。でも、繁華街を駆けずり回り、入稿前に徹夜する生活が続くと、服は手抜きがちになり、コンシーラーの量が増えた。ほうれい線が出てきた自分の姿を見ると、その考

えは無理だと思うようになった。同級生から結婚式の招待状を何通も受け取るうちに、結婚して、楽な仕事をしながら、のんびり暮らすことにいつの間にか目標がすり替わっていた。

涙ぐみそうになったのをこらえてから、冷めきったカップに手を伸ばすと、バッグの中の携帯が震えた。原田からだ。

「黒木、どんな仕事でもいいって言ったよな」

1

残りのコーヒーを流しこみ、急いでオフィスに戻った。

「rizの編集部だったら、戻れるかもしれないぞ」

原田が笑顔を見せる。

「えっ、本当ですか」

ああ、助かったあ。さやかは大きく息を吐いた。久しぶりに呼吸をした気分だった。

「向こうの編集長に話をつけてあるから、今から行けるか」

「はい。ありがとうございます」自然と明るい声が出た。

『r i z』は三十代の女性をターゲットにしたライフスタイル誌だ。ファッションやメイクだけでなく、恋愛、ダイエット、旅行や流行りのレストランのことも扱っている。r i zの編集に懂れて、入社を希望する人も多い。営業部や経理部への異動ではないので、むしろよかったかもしれない。

原田はエレベーターに乗り一階のボタンを押す。r i z編集部はこのビルから引越して、別の場所にある。

外に出ると空の色が少し明るくなった気がした。

原田は昼のオフィス街をゆっくりと歩き、さやかはそのうしろをついていった。

「どうしてr i zはわたしを受け入れてくれるんですかね」

さやかが尋ねると、原田は振り向いて目を細めた。

「編集長の宇佐美君に話したら、引き取ってもいいって言ってくれてな」

「宇佐美さんがですか？」

「ああ」原田がうなづく。「もともと宇佐美君はメジャー誌で編集やってたし、海外での編集経験もある。しかも、まだ四十そこそこさ。黒木にとってもよかつたんじ

やないか」

その編集長のこととは知っていた。海外の出版社から移ってくるなり、アート寄りのファッション誌だったr i zを、恋愛やダイエット情報がメインのライフスタイル誌に路線変更した。しかも男性アイドルのヌードをグラビアに使ったり、病院のクローンを付けて美容整形を特集したりと、斬新な企画を当てまくり、低迷していたr i zをV字回復させたのだ。二十万部売れば上出来の女性誌で百万部を突破したこともあるらしい。

「でも厳しそうですね。宇佐美さんって」

「まあな。雑誌に人生かけてるような男だから……。でも、ちょうどお前みたいなやつが欲しかったらしいぞ」

「えっ、そうなんですか」

もしかしたら、B級ミシユランが認められたのかも。ということとは、r i zは感度の高い女性誌だから、麻布とか恵比寿にあるオシャレなレストランで取材するんじゃないの。これでガード下の居酒屋とラーメン屋を卒業できる。そう何度も悪いことが続かわけないのだ。さやかは笑いを噛み殺した。

しばらく歩いたところで原田が立ち止まった。目の前には白い壁にアーチ型の窓が

並んだ古いビルがある。

エレベーターを昇り、「E-z編集部」とプレートが貼ってある木目の扉を開けた。中は白いタイルの床にアンティーク調の木製のデスクが並べてある。天井は高く、コンクリートが剥き出しだ。

普通、雑誌の編集部は原稿やポスター、撮影道具などが散らかっているものだが、ここは気持ち悪いくらい片付いている。

原田はそんなことを気にしない様子ですたすと進んでいく。奥の扉から背の高い男が出てきた。見覚えのある顔だ。編集長の宇佐美だとわかった。

間近で見ると、思っていたより顔が濃い。そして肌が極端に黒い。それなのに光沢のある黒いシャツに黒いネクタイを合わせていて、ベルトのバックルはやたらでかかった。ジャケットの奥襟はワニ革だ。

ファッション誌の編集長だからありなのかもしれないが、街を歩いていたら絶対浮く。特に女子受けは悪そうだ。

「ああ、これはこれは——。原田編集長、わざわざご足労いただいてすみません」  
宇佐美はジャケットのボタンを締め、頭を下げた。外見とは反対に腰が低かった。  
「彼が宇佐美君だ」

「はじめまして。黒木さやかと申します」さやかが挨拶をしても、宇佐美は一切こちらに目を向けず、「原田さんゴルフ行ってます？」と素振りをして、「久しぶりに銀座でもどうですか」と手を傾けた。

原田が帰ったあと、宇佐美は何も言わず応接室に入り、黒い革張りのソファにふんぞるように座った。持っていたファイルをテーブルに放る。

「あなさ、お前、一つ聞いていい?」

「はい」さやかは背筋を伸ばした。

「お前、なんでマーク・ジェイコブスに猿の人形つけてんだ?」

「はい?」声がうわずった。

「いや、だから、お前が右手に持つてるマーク・ジェイコブスのトートだよ。四年前の秋冬の」

さっきまで原田に見せていた笑顔は消え、宇佐美はなぜかバッグにつけた猿の人形を見て怒っている。

「なんでつけてるかと言われても……」

言葉を濁すことしかできなかった。「インド旅行で買って、なんとなくつけた」と

は決して言える雰囲気じゃないからだ。

「お前さ、ニューヨーク育ちのマーク・ジェイコブスが、ルイ・ヴィトンで十六年間デザイナーやってたことが、ファッション界にどれほど大きな影響を与えたかわかってつけてんのか」

「え、いや、ちよつと……」

「これだから週刊誌のやつは……」宇佐美は舌打ち混じりに言った。「rizの人間になるんだつたら自覚を持って。いいな」

「はい、わかりました」さやかは納得のいかないまま返事をした。

でも、内心ほつとしていた。仕事に復帰できただけでなく、新しい職場への配属で婚約破棄になった噂が広まらずにすむ。

さやかが息をつくとき、宇佐美は身を乗り出し、咳払いをした。

「俺が復職できるように手配してやつてもいいが、一つだけ条件がある」

「なんですか条件って?」

「半年以内に結婚しろ」

は? さやかは絶句した。

「いや、だから結婚。できなかったらクビだから」宇佐美はそれが何事でもないかの

ように言う。

「あのう、おっしゃってる意味がよくわからないのですが……」

「結婚の特集をするとrizは売れるんだよ。だから来月から婚活をテーマにした連載をやる。お前は体当たりで婚活して、それを記事にしてくれ」

この人は「これコピーしといて」と同じ口調で無茶苦茶なことを言っている。

嘩然とするさやかをよそに、宇佐美が聞いてきた。

「婚活って言ったら、お前は何を思いつく?」

「えっ、婚活ですか……。えっと、すぐに思いつくのは婚活パーティーですかね」

「お前は、そんなパーティーに行きたいか?」

「いや、そういうのはちよつと……」

以前ライターの知り合いに誘われたことがあるが、なんとなく抵抗があつて行かなかった。

「そうだろ」宇佐美がうなずく。「rizでも、婚活パーティーとか婚活サイトとか、他の婚活ビジネスをリサーチしたんだ。そしたら結婚に困るような男しかいないとか、自分が必死になってるみたいでいやだとか、心理的なハードルが高いわけ」

「はあ……」

「つまりな、ほとんどのやつが普通に会って恋愛して結婚したいって思ってたんだ。でも現実はその簡単にはいかないから、みんな悩んでる。だからお前は本当の婚活とは何か、実際に体験して読者に伝えるんだ」

「ちょっと待ってください。どうしてわたしなんですか?」

「逆にお前しかいないだろ。三十で男に結婚を迫って、寿退社した翌日に出戻りするんだから」

急に顔が熱くなった。婚約破棄されたことが宇佐美に伝わっているとは思ってなかった。しかもふられたって決めつけてるし。実際、ふられたけど……。というか、まだ三十じゃない。二十九歳だ。とにかくデリカシーがなさすぎる。

「仕事のために結婚するなんて、絶対いやです」

「どうしてもいやか?」

「はい、いやです」

「あっ、そう。じゃあいいや」

宇佐美はそう言うのと席を立ち、「三十路で再就職は厳しいだろうなあ」と口にしなから、会議室のドアノブに手をかけた。

そうだ、わたし無職なんだ。忘れてた――。

「ちょっと待ってください。編集長」

さやかは慌てて立ちあがり宇佐美を呼びとめた。

「わたし週刊エッジでB級ミシュランっていうグルメコーナーやって、評判よかったです。だからr i zでもグルメ記事をやらせてもらえませんか」

振り返った宇佐美はさやかをにらみつけた。

「お前みたいなB級女にr i zのグルメ記事が務まるか!」

「び、B級女って……」

初対面でそんなこと言うか、普通。いくら編集長だからって言っていていいことと悪いことがある。

「いくらなんでも失礼じゃないですか」つい大きい声を出してしまっ

「本当のことを言ったまでだ」

「わたしの何を知ってるっていうんですか」

宇佐美は口の端だけで笑ってから、ソファーに腰を下ろし足を組んだ。素足に革靴を履いていて、足首には細いチェーンが見える。

「なぜ、お前が男に捨てられたか教えてやろうか」

どうして初対面の上司からそんなことを教えてもらわなきゃいけないんだ。さやか

は返事をしなかった。

「特別に教えてやろう……」宇佐美は目に力を入れ、不自然な二重瞼をつくる。「それはな、お前が安いからだ」

「どういう意味ですか、それ」さやかは思わず身を乗り出した。

「安いというのは、市場価値が相対的に低いということだ」

「市場価値？」

「そうだ。市場価値だ。例えばお前がバッグを買に行ったとするだろう。ユニクロのバッグが百万円で売ってたら買うか？」

「絶対買いません」

「そうだよな。エルメスのパーキンが百万円だったら買うやつがいるかもしれないが、ユニクロのバッグが百万円だったら誰も買わない。百万円とバッグの価値が釣り合っていないからだ」

「それはわかりますけど、その話とわたしがどう関係するんですか」

「バッグと同じように、男も無意識のうちに女の価値を計算してるんだ」

宇佐美はまくしたてるように話し始めた。

「男はな、いい女なら金も労力も惜しまない。プレゼントが欲しいと言われればプレ

ゼントをするし、迎えに来いと言われれば迎えに行く。逆にどうでもいい女には何も提供しない。お前の男は、お前に結婚という代償を払う価値がないと判断したんだ。要するにお前はユニクロってことだ。ユニクロキだ」

背もたれに仰け反り、応接室に大きな笑い声を響かせた。

なんなのユニクロキって。そんなにユニクロ着てないし。怒りがこみ上げてくる。

「さっきからわたしのことをバカにしていますけど、男に困ったことありませんから。

B級ミシランにわたしの写真が載ったときに、読者から可愛いってはがきも来たことあるんです」

さやかは強い口調で言い返した。

宇佐美はそれには何も答えず、テーブルの上に置いてあったファイルから履歴書を取り出し、入社したときの顔写真とさやかを見比べた。

「お前太ったな」

はっ——。

何か言われたら言い返そうと思っていたが、そのひとことで口が止まってしまった。七年間B級ミシランを担当させていで、ラーメンとか揚げ物とか食べなきゃいけないで、体重が六キロ増えたのだ。最近では体のラインが隠れるワンピースを着ること

が多くなった。

「これは七年前の写真か」宇佐美がつぶやく。

ふと去年の忘年会のことを思い出した。流行りのアイドルグループの曲を、女子社員が振り付きで歌うのが毎年恒例だったが、去年から誘われなくなった。誘われたときは「えー、わたし？」といやがっていたが、内心楽しみにしていた。

チャゲに告白されたのも三年前のことで、それ以来誰にも告白されたことがない。履歴書の隅にいる七年前の自分に「もう、若くないんだよ」と言われた気がした。もしかしたら、結婚どころか彼氏すらできないかもしれない。急に不安が襲ってきた。

「逆に言えば、お前がエルメスくらい価値を高めれば、男なんて余裕ってことだ」

「そんなこと言ったって、今から価値を高めるなんて難しいんじゃない？」つい弱々しい声を出してしまふ。

「簡単だ」

そうは思えなかった。これからもっと体が衰えていくというのに、二十九歳の今から女としての価値を上げるなんて簡単なことではない。

「お前はパーキンがなぜ百万円で売れるかわかるか？」

「それは高級な革を使ったり、職人さんが手作業でつくってたりするからじゃない

ですか」

「もちろんそれもある。でもパーキンと同じ素材で同じ人間がつくったとしても、エルメスじゃなかったら百万じゃあ売れないだろ」

「まあ、そうですね……」

「エルメスはな、セールをしないし、全て自社生産をしてアウトレット品を出さない。予約してから一年待つほど生産量を制限する。バッグに価値を持たせるために、シヨウウィンドウの見せ方からアフターサポートまであらゆる企業努力してるんだ」

たしかに言われてみれば、パーキンが大量生産されていて、いつでも買えたら百万円で買おうとは到底思えない。

「要するにな、同じものでも売り方しだいで一万にも百万にもなるんだ。だから、女としての価値なんて売り方しだいでいくらでも上がる」宇佐美は勝ち誇ったような顔で言った。

でも、素足に革靴を履いた四十男の話聞いて、はい頑張ります、となるわけがない。だいたい、恋愛の話なのでブランドとかマーケティングの話を持ち出すんだ。

それから宇佐美はエルメスと、自分の着ているジャケットと、それを着ている自分

がいかにかセンスがいいか語り続けた。

二日酔いとは別の頭痛がしてくる。

「あのおう」気持ちよさそうに話している宇佐美をさやかは遮った。

宇佐美が舌打ちする。「なんだ？」

「やっぱりわたしにはこの企画できません」

「どうして」

「……まだ彼のことを忘れられないんです」

正直に言うことにした。企画自体に無理があるが、今の自分が新しい男を見つけて、それを記事にするなんてもっと無理がある。

「じゃあ、そいつと復縁して結婚すればいい」

「それができないからこんなことになってるんでしょ」と言いたかったが、一応編集長なので「それは難しいと思います」と言葉を変えた。

「俺の言ったとおりやれば余裕だ」

「どうしてそんなこと言い切れるんですか？」

「日本で一番恋愛に詳しいのは俺だからだ」

「はい？」何言ってるの、この人。つい顔をしかめてしまう。

「いいか、rizの結婚特集はな、今まで九回やって全て完売してんだ。なぜだかわかるか？ 毎回、読者の悩みを聞いて、男にアンケートとって、俺が完璧な分析をしたから、売れるべくして売れたんだ。つまりな、ここには客観的なデータに基づいた日本最高の戦略があるんだ。もし俺の言ったとおりやって結婚できなかつたら、アパートの二階で孤独死すると思ってるいい」

孤独死って……。自信たっぷりに言い切るの、言葉返すのも面倒になった。

「とりあえず二週間、そいつの電話もメールも無視しておけ。お前のために完璧な戦略を考えといてやるから」

やりたくなかった。「連絡を無視する」というのは、いかにも雑誌の恋愛特集に書いてありそうなことだ。マニュアルに従って行動なんてしたくない。だいたい恋愛のことなのに「戦略」とか言ってしまうあたりが、なんかさむい。

「俺の言うとおりにやらなかつたらクビだからな」

宇佐美はそう言ってソファから立ち上がると、「暑いな」という仕草でネクタイを緩め、不自然に裏返した。

HERMESの文字が見えた。



「さやか」

編集部を出るとき、少し酒焼けした声に呼び止められた。

同期入社の子浦多香子だ。ゆるめのニットにロングネックレスをあわせている。パ  
ンツは腕も通らないんじゃないかと思うほどスキニーで、ベルトの太いメンズの腕時  
計をしていた。派手な顔は相変わらずだったが、ファンデーションが少し濃くなった  
気がする。

「久しぶり。元気だった？」多香子はさやかの腕に触れて言った。「聞いたよ。大変  
だったらしいじゃん」

「うん、まあね……」

久しく会っていないなかった同期に、婚約破棄になった話をどこまでしていいかわから  
ず、あいまいに答えた。

「ねえ、今日空いてる？ さやかの歓迎会しよう。話聞いてあげるから。ね、行こ行

こ」

まだ昨日の酒が残っていて、頭が痛い。だから今日はアルコールを抜きたかった。  
でも多香子はストールを巻き、すっかり帰り仕度を済ませている。仕方ないので一時  
間だけという約束で駅前のバーに入った。

雑居ビルの地下にある「クリフ」というバーは多香子の行きつけで、いつも一人で  
飲んでいるらしい。

カウンターのスツールに座ると同時に、多香子は赤ワインをポトルで注文した。  
とにかく酒が強い子で、みなで飲みに行くときと男たちが先に潰れるのが、いつものパ  
ターンだった。ただ、よく遊んだのは入社したところで、男性週刊誌とファッション誌  
という文化も生活リズムも違う編集部で働くうちに、なんとなく疎遠になっていた。  
「乾杯。今日から仲間ね」多香子がグラスを持ち上げた。

仲間というのは、仕事仲間という意味か、それとも同じ独身の三十女という意味か  
——。まあいいか。グラスの中で揺れる赤い液体を見たら考えるのが面倒になってき  
た。とりあえず飲もうかな。

「うちの編集長、変わってるでしょ」

「うん。まさかあんな人だと思わなかった」

多香子が笑う。「最初はみんなびっくりする。でもさやかもすぐ慣れるよ」

「そうかなあ……、まったく自信ないんだけど」宇佐美に言い渡された婚活企画のことを思い出し、肩を落とした。

「あーあ、編集長、わたしの企画のこと考え直してくれないかな」

「うーん」多香子が首を捻る。「頑固だからね、ボスは」

たしかに宇佐美は頑固そうだ。それも極端に。

「ボスってずっと女性誌やってきて結果出してきた人でしょ。だから自分の考えを曲げないのよ。そうそう、この前もトートバッグを付録につけるような話があったんだけど、そんなものに頼らなくてもやっていけるって断ったの」

きっと婚活企画から逃れることはできないのだろう。わかつてはいたけれど、改めて人の口から聞かされると、ため息が漏れる。

「大丈夫だって」多香子はさやかのグラスにワインを注ぎ足した。「うちのボス、あ見えていろいろ考えてるから」

「ふうん……」

「うまく広告を増やして、このご時世に赤字出さずにやってるんだから、実力はある

んだと思う」

編集長としての実力があっても、人の恋愛を成就させる能力とは別だ。だいたい宇佐美はモテるのか。

「結婚はしてるのかな？」気になっていることを聞いた。

「してない。プライド高いし、潔癖だし、典型的な結婚できない男」

やっぱりそうか。それは思ったとおりだ。それにしても結婚できない男から結婚する方法を教わるって、いったいわたしはどうなってしまうのか。

「付き合っている人もいないんじゃない。本人はモテるって言うけど、すごく変わり者だから。顔はいいんだけどね」

「わかる」さやかはわざと大げさにうなずいた。あの性格じゃどんなに顔がよくても付き合えない。

「顔の無駄遣いだよ、あれは」多香子がほそりと言った。

宇佐美の顔を思い出したら吹き出した。たしかに顔を無駄遣いしている。

この四年間、仕事に追われて自由な時間がなかった。休日も和也を優先して過ごしたので、女友達とは遠ざかっていた。そのせいか、多香子の明け透けな話を聞いて、大口を開けて無防備に笑っていたら、女友達と過ごすのも悪くないかな、そう思えて

きた。

ワインが進み、視界が揺れ始める。

多香子だったら婚約破棄されたことを話してもいいような気がしてきた。むしろ聞いてほしくなった。

「それで聞いてよ。前に話した元カレいるでしょ。そいつに二十歳ハッパの女がいてさ……」

それなのに手酌でワインを注ぐ多香子は、男の話を続けて話す隙を与えてくれない。気をつかっているのか、励まそうとしているのか、饒舌で、婚約破棄のことには触れようとしなかった。

「それから、わたしを誘ってくるのは既婚者はつか……」

多香子は最近、三年付き合っていた彼氏から、「お前は一人でも生きていけるけど、あいつは俺がいないとだめなんだ」と別れを告げられ、既婚者にしか誘われなくなったらしい。それを聞いて、多香子は男から見ると隙がないと、同期の男が言っていたのを思い出した。

この子変わったな。いつもファッションが完璧で、rizに入りたくて大手の内定を蹴るような子だったから、昔は少し近寄りがたかった。でも、今は妙に親近感がある。

赤ワインのボトルをほとんど一人で空けた多香子は、一時間だけと約束したのに、二本目を注文する。

赤いエナメルのミュールをつま先だけで履き、ヒールをぶらぶらさせて、バーテンに「男を紹介しろ」と絡んでいた。

女から見ると隙だらけだ。

ただ、自分と似た境遇の三十女を見つけて少し安心してしまった。

★

rizの発売日は月に二回、五日と二十日だ。十月二十日号から四月五日号までの計十二回のうちに、誰かしらと結婚しなければ、晴れて会社を辞めさせられる。

翌日、ため息をつきながら編集部のドアを開けると、みなからちらちら見られている気がした。隣の席の人にはやついた顔で挨拶され、多香子には「まあ、頑張つてよ」と肩を叩かれた。

いったいななんだ。さやかは訝いぶりながらパソコンの電源を入れて啞然とした。

《朗報》黒木はみんなの部下」という件名のメールが届いていたのだ。

宛先が r i z スタッフ全員の同報メールで、二か月の間、さやかに好きだけ仕事を振っていた、という主旨だった。差出人はもちろん宇佐美だ。

r i z のスタッフは容赦なかった。

ブランドのプレスから借りた服の管理や、掲載店の電話番号のチェックなど地味な仕事を死ぬほど頼まれた。撮影に駆り出されたときはロケ弁の手配までやらされた。モデルたちはヘルシーじゃないとか、可愛くないとか、弁当にやたらうるさい。週刊誌のときはポリウムさえあれば、文句を言う人はいなかった。

おかげで会社に泊まるが増えた。婚活どころか、お風呂に入れない。涙袋が黒ずんできた。

ただ、悪い気のしない自分もいる。週刊誌の読者はほとんどが男性だったが、r i z の読者は女性だ。婚活企画にはまだ抵抗があるけど、日本のどこかで同じ悩みを抱えている子が、自分の記事を読むのかと思うと、少しだけ前向きな気持ちになってきた。

肝心の和也からは電話もメールもない。携帯の受信ボックスが、広告のメールで独占された。

一週間くらいたったところ、和也から《ひさしぶり、元氣か》という当たり障りのないメールが届いた。電話して声を聞きたくなかったが、これも仕事だ、と言い聞かせて我慢した。

その二日後には《式場のキャンセルしておいたから》というメールが届いた。返信したい気持ちをなんとか仕事に逸らした。というより仕事に逸らされた。

校了寸前にもかかわらず、クライアントからクレームが入って、急遽、巻頭ページの差し替えが決まったのだ。その二日後には電話もあったが、校了日でちょうど客先から印刷所に向かっていたので「ごめん、かけ直す」としか言えなかった。

そして二週間たった今日、和也からメールが来た。

《会って話したいことがある。連絡くれないか》

＊

全体ミーティングのあと、会議室に宇佐美を引きとめ、和也から会いたいとメールがあったことを報告した。

「俺の言ったとおりだな」

宇佐美は会議室の窓ガラスに自分を映し、シャツの襟が立っているか確認している。「じゃあ、そろそろ連絡させていただきます」

さやかはその場で携帯を取り出した。今すぐ和也にメールしたかった。

「待て」宇佐美は振り向き、二重瞼に力を入れた。「会ったときが勝負だ。ここでミスを取り返しのつかないことになるぞ」

もういいでしょう、そういうのは。連絡来たんだし。早くメールさせてほしい。

「あのおう、そろそろ自分のやり方でやらせてもらえませんか」

「だめだ。お前の乏しい経験に頼ると失敗するぞ。愚者は経験に学び、賢者は歴史に学ぶ」

「でも、恋愛って頑張ってるもんじゃないと思うんです」

さやかがい返すと、宇佐美は大げさのため息をついた。

「やっぱり、お前は一生独身確定だわ」

「は？　なんでわたしが一生独身なんですか」

それはあんたでしょう。宇佐美の言い方につられて、つい語気を強めてしまう。

「お前は男から大切にされたいんだよね？」

「決まってるじゃないですか。そんなの」

「だったら、どうして男の意見を聞かない？　マーケティングの基本は顧客のニーズに耳を傾けることだろ。お前の客は誰だ？　男だろ。だったら男の意見をもっと聞け！」

ここ二週間、宇佐美には面倒な雑用を山ほど言いつけられていた。昨日は配本用の段ボールを八十個くらいつくって、指がささくれだらけになった。頭に血が昇る。

「わたしだって彼のためにいろいろしました。仕事が忙しいって言うから、電車で一時間かけて、家まで行ってあげてたし、いつも部屋の掃除してあげてたし、和也は婦人警官見ると興奮するって言うから、ネットで衣装買ってコスプレだっただけです」

「それはな、顧客のニーズを満たしてるんじゃないかって、顧客の言いなりになってるんだ」宇佐美が呆れた顔で言う。

さやかは余計なことを言ってしまったことに気づき、顔が熱くなった。

「いいか、男が喜ぶことをするんじゃないかって、男の脳が喜ぶことをするんだ」

「どういうことですか？」

「人間の脳っていうのは、不安になるとな、興奮するんだ」

不安になると脳が興奮する。どういう意味だ？

「つり橋理論って知ってるか？」宇佐美が聞く。

「ああ、それ知ってます。カッブルでつり橋に行くのと、不安定な場所に立っていることにドキドキしてるのを、恋愛でドキドキすると錯覚するってやつですよ」昔、雑誌で読んだ知識を話した。

「そうだ。だから次会うときは、そのつり橋理論を応用すればいい」

「じゃあ、彼をつり橋に連れていけばいいってことですか」

「あほか。つり橋で復縁をせまる三十女なんて怖すぎるだろ」

さやかは頬を引きつらせた。

「つり橋理論で大切なことはな、人間は不安な状況じゃないと恋愛感情が生まれなくてことだ」

「不安な状況ですか……」

「そうだ。キャンブルだつて自分の金を一瞬で失うかもしれない不安な精神状態だから、脳が興奮してやめられなくなる。恋愛も同じ」

「じゃあどうすればいいですか」さやかは口をすぼめた。

「聞きたいか」

さやかがあなずくと、宇佐美は「特別に教えてやろう。B級女のくせに運だけはA

級だな」と勿体ぶった。

そして宇佐美が口にした「戦略」とは、とんでもないものだった。

和也と会うのを三十分で切り上げたあと、あらかじめ他の男と待ち合わせをしておいて、その様子を和也に見せるといふものだった。

「それは絶対にいやです」さやかはきっぱりと言った。

「なぜだ」

「他の男といるところなんて見せたら、嫌われるでしょう」

「たしかに、完全に他の男の所有物に見えたら身を引くかもしれない。でも今お前が買い手を探して、売りに出されている状態だったら、お前の価値は上昇するだろう」

「どうして、そんなことが言えるんですか」

宇佐美は椅子からゆっくり立ち上がり、会議室にある液晶テレビに手をのせた。

「お前、このテレビはいくらだかわかるか？」

「テレビの値段となんの関係があるんですか」

「いいから、答えろ」宇佐美は声を荒らげた。

さやかは面倒だなと思いつつ「十万円くらいですか」と投げやりに答えた。

「まあ、そんなもんだ」

宇佐美は手を払い、ジャケットの襟を直す。

「そして俺の着ているこのドルチェ&ガッバーナのジャケットは十六万だ、お前が着ているカーディガンは七千円くらいだろう」

「え、まあ……、はい」

本当は冬のセーラーで五千円で買ったものだったので、声が小さくなってしまった。

「じゃあ、お前はいくらだ？」

は、何言ってるの。わたしの値段ってどういうことだ。

「値段はわからないよな。テレビだったら値札がついてるし、ネットで調べることができる。でも、お前には値札がついてるわけでもないし、ネットに載ってるわけでもない」

さやかは黙ってうなずいた。

「じゃあ、男はどうやってお前の価値を測ると思う？」

「さあ……」首を傾げた。価値の測り方なんて考えたことがなかった。

「いいか、モノには絶対的な価値なんて、そもそも存在しないんだ。人間が相対的に価値を計算してるにすぎない。目の前に宝石を出されて、これは価値の高い宝石です。三十万円ですって言われても、それが高いか安いかなんてわからないよな？」

「まあ、たしかに……」

「でも、世界に三つしかありませんとか、五百年前のものですって言われたら、安心して思うだろ。価値がわからないものはな、物差しの当て方しだいで価値の感じ方が大きく変わるんだ」

「物差しですか……」

「ああ、お前が魅力的な男に誘われていることを知れば、それが判断基準になって、一緒にいるお前も価値が高いと認識される」

いい男と一緒にいたからって、魅力的に見えるなんてことはあるのだろうか。

「ケリーバッグあるだろ、エルメスの。あれの名前の由来知ってるか？」宇佐美はさやかの目の前の椅子に座って聞いた。

「たしか、女優の名前ですよね」

「そうだ。ケリーバッグは最初、『サック・ア・クロア』って名前だった。グレース・ケリーっていうアメリカの女優が、モナコの王と結婚してパパラッチにカメラを向けられたとき、とっさに妊娠したお腹をそのバッグで隠したんだ」

「それでどうなったんですか？」

「その写真が週刊誌の表紙を飾ってバッグが一躍話題になった。それで当時のエルメ

スの社長がそれに目をつけてな、ケリーって名前を使わせてもらえるよう、モナコ王室にかけあったんだ」

王様と結婚した女優の名前がつくなんて、素敵な話だ。

「ナイキだってマイケル・ジョーダンやタイガー・ウッズに数百億円の契約金を払っていただろ。エルメスもナイキも『誰が持つてるか』が、消費者が価値を測るときの大きな判断基準になっていることを利用してるんだ」

それはわかる。それはわかるんだけど、これは恋愛の話だ。バッグや靴とはわけが違う。他の男と一緒にいるところを見せるなんて、それこそ取り返しのないことになる気がする。

「問題は誰を見せるかだな……」

宇佐美は腕を組み、しばらく険しい顔で考え込んだ。

「ちなみに聞くが、お前の元カレはイケてるのか？」

「まあ、はい……。そうだと思います」

イケてるって……。微妙な死語だ。

「だったら競争意欲を煽るような、魅力的なやつの方がいいだろうな。男は競争をしたがる」

「でも、そんな知り合いはいません」

付き合っているところは和也に一途だったから、男友達はほとんどいなくなっていた。こんなことをお願いできる男なんて、チャゲくらいだが、お世辞にも魅力的とは言えない。

「ケイタに頼んでやろうか？」宇佐美は頭のうしろで手を組みながら言った。

「えっ、ケイタさんですか……」

ケイタは最近ドラマや映画で見かけるモデル出身の俳優だ。もともと宇佐美がスカウトしたらしく、編集部によく顔を出すので、お茶を出すときに顔見知りになった。顔の大きさがさやかと同じくらいで、一般人にはないオーラを持っている。

「そんなこと、やってくれますかね？」

さやかは頬が緩みそうになったのを抑えて聞いた。

「俺から頼めばやってくれるだろ。飯でもおごってやれ」

「まあ、別にいいですけど……」

さやかはまんざらでもない返事をした。